



発掘された奥州市展

中世の譜

―胆沢・江刺郡の城館とその時代―

2020 ▶ 2021

解説書

【会場・会期】

えさし郷土文化館

2020年12月12日(土)～2021年1月10日(日)

奥州市埋蔵文化財調査センター

2021年1月16日(土)～2月14日(日)

奥州市牛の博物館

2021年2月20日(土)～3月14日(日)

胆沢郷土資料館

2021年3月27日(土)～5月9日(日)

奥州市役所衣川総合支所

2021年5月13日(木)～5月27日(木)

ごあいさつ

現在奥州市内では、1000を超える遺跡が確認されています。

これらの遺跡のうち、特に重要なものは「史跡」に指定され、
厳重な保護が図られています。市内には、縄文、古墳、平安から
中世、近世と各時代を代表する国指定史跡がそろっていて、
本市の歴史を特徴づけています。

今年度の企画展では、鎌倉時代から安土桃山時代までのいわ
ゆる「中世」と呼ばれる時代を展示します。特に、胆江地方を
拠点とした人々の拠点である城館に着目し、文献や宗教資料も
織り交ぜつつ、地域の特徴を明らかにしていきます。

奥州市内5地域での巡回展示を通して、多くの方々に地域の
歴史をご覧いただければ幸いです。

令和2年 12月

奥州市教育委員会

教育長 田面木 茂樹

はじめに

今回の巡回展では、鎌倉時代（13世紀）から安土桃山時代（16世紀）までの史資料を展示しています。これらの時代は三時代区分法では「中世」とも呼ばれます。この時期には、平安時代までの京都を中心とする支配秩序を守ろうとする人々と、それに抵抗して新たな秩序を求める人々がせめぎ合い、日本史の中で最も社会が混乱していました。

本展示では、これらの時代を生き延びた胆江地方の人々について、最新の知見を踏まえて明らかにしていきます。

I 胆江地方の中世を辿る

1. 鎌倉時代

東北地方で栄華を誇った平泉藤原氏は、文治5年（1189）の奥州合戦で源頼朝に敗れ滅亡します。平泉藤原氏の支配領域には、新たに頼朝の御家人（家臣）が所領を与えられます。胆江地域は、下総国葛西御厨を本拠地とする葛西清重に与えられることになりました。

清重には、胆沢・江刺郡を含む葛西五郡二保（他には牡鹿・磐井・気仙郡、黄海・奥玉保）と呼ばれる広大な所領の他、「奥州惣奉行」と呼ばれる陸奥国内の御家人を統制する役割が与えられました。

平泉藤原氏の中心拠点である「平泉保」については、清重には与えられず鎌倉幕府の直轄領となりましたが、「奥州惣奉行」としての清重の拠点は平泉保内にありました。同じく「奥州惣奉行」に任じられた伊沢家景（留守氏の祖）は、陸奥国府の多賀城周辺に拠点を置いています。ここから、鎌倉幕府による陸奥国の支配拠点は平泉と陸奥国府にあったことがわかります。また、平泉藤原氏は滅亡したとはいえ、その影響力が非常に強く残っていたことがうかがえます。

清重の死後、葛西五郡二保はその子供たちによって分割相続されたとみられます。孫の代にはさらに分割相続され、所領の細分化が進みますが、葛西惣領（宗家の当主）を中心に、各庶流（分家）が相互に連携し、一つの葛西「家」として存続します。彼ら一族は、通常時は所領にはおらず、幕府の有力御家人として鎌倉に在りました。このことは、鎌倉中期まで彼らが「鎌倉中」として御家人の名簿に登場することからもわかります。実際の在地支配を担当していたのは、彼らの被官（家臣）たちで、葛西御厨内の地名を名字とする人々も確認されています。

しかしながら、度重なる幕府内の勢力争いを勝ち抜いた北条得宗家によって、その専制支配が進む中で、葛西氏もその所領支配の強化に迫られます。葛西領内では、胆江地域の所領支配をめぐる、葛西一族と中尊寺が何度も相論（裁判）を繰り返しています。この争いの中、中尊寺は北条一族出身者を繰り返し僧侶として迎え入れ、葛西氏に対抗していくこととなります。この両者の争いは、鎌倉末期まで続きました。



鎌倉時代の葛西領(5郡2保)



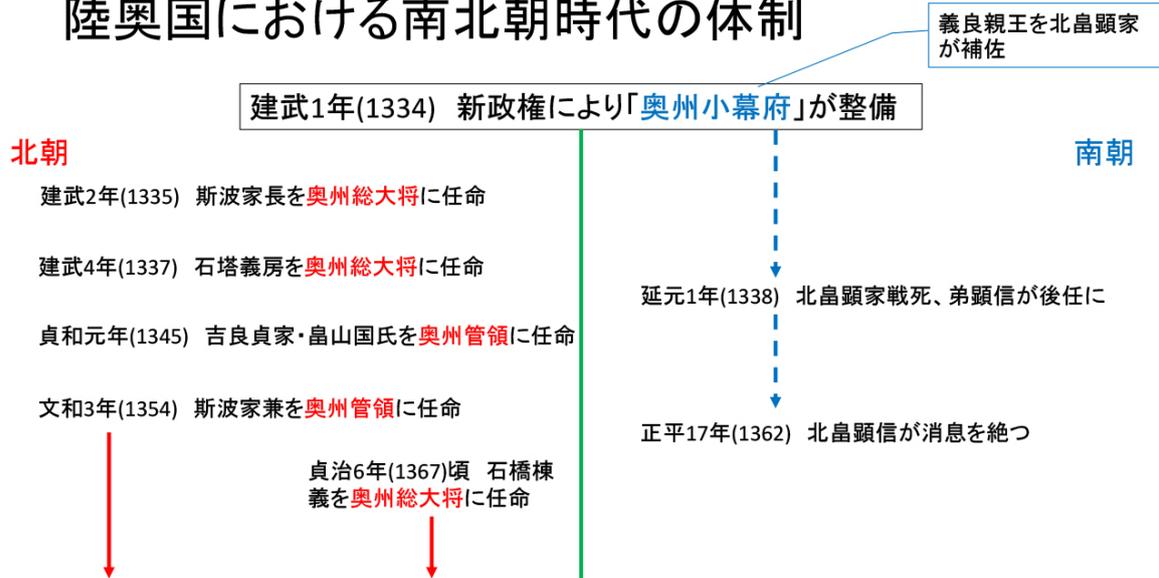
出典：一関市博物館 2015『葛西氏の興亡』

2. 南北朝時代

元弘3年(1333)、北条得宗家による専制が全国の御家人の反発を招き、鎌倉幕府が滅亡します。その後、倒幕を主導した後醍醐天皇により、建武の新政が開始されます。しかしながら、後醍醐天皇による新政に不満を持つ足利尊氏が建武2年(1335)に新政から離反して北朝を樹立したことにより、全国のあらゆる勢力が北朝方・南朝方に分かれて争う南北朝の内乱が始まります。

東北地方においてこの争乱は、陸奥国府を抑えて拠点とする南朝方と、それに対抗して関東地方(鎌倉)から東北地方を牽制する北朝方の争いとして始まります。南朝方の体制は、建武の新政開始直後に構築された、後醍醐天皇が陸奥国に派遣した義良親王を頂点とし、陸奥守・鎮守府将軍の北畠顕家が親王を補佐するという「奥州小幕府」体制が基軸となります。この奥州小幕府体制は、後に出羽国もその体制に組み入れ、東北地方において強力な支配体制を構築します。

陸奥国における南北朝時代の体制



南北朝の争乱が始まると、陸奥国府を既に抑えている南朝方に対して、北朝方が東北地方の反南朝勢力をまとめて対抗します。鎌倉で義詮（尊氏の子、後の室町幕府2代将軍）を補佐していた斯波家長を奥州総大将に任じて攻勢を強めたのです。しかし、北朝方は顕家の勢いを止めることはできず、顕家の上洛の途上で鎌倉が攻められて家長が討ち取られるなど、北朝方の東北地方の支配体制は動揺を続けます。やがて全国的な北朝方の巻き返しが進む中で、東北地方の南朝勢力も弱体化し、暦応元年（1338）に顕家が2回目の上洛の際に戦死すると、北朝方が優位に立つようになります。

この争いの中、胆江地方には、それまで鎌倉に居住していた葛西一族が多く移住してきました。それまでの鎌倉から代官を派遣するという支配体制から、直接現地に一族が赴き支配するという体制に転換したのです。移住してきた具体的な時期は明らかではありませんが、鎌倉末期から南北朝初期にかけて葛西一族と中尊寺が繰り返し所領をめぐる争っていることから、この頃に現地支配体制の強化（所領への移住）が起こったとみられます。

また、葛西惣領の清貞は、葛西家による支配を強化するために、支配拠点を平泉から北上川河川と太平洋海運の要衝である牡鹿郡に移動させました。清貞は交通の要衝を押さえることにより葛西家の影響力の増大を企図した訳ですが、結果として胆江地域には葛西惣領の力が及びにくくなり、胆沢郡では柏山氏、江刺郡では江刺氏の自立性が強まることとなります。

清貞は移住後には南朝方に属して活躍します。しかしながら、一族は一枚岩ではなく、北朝方に属する人々が存在していたことが分かっています。康永元年（1342）、顕家の後任であるその弟北畠顕信と、北朝方で新たに奥州総大将に任じられた石塔義房が栗原郡三迫で合戦を繰り広げますが、その際に義房が柏山氏・江刺氏に軍勢催促を行っています。葛西惣領の清貞は顕信に味方していますので、やはり葛西領内でも対応が割れていたことが分かります。結果、東北地方の国人たちの支持を得られなかった顕信は敗北し、東北地方における南朝勢力の敗北は決定的となりました。葛西一族も、この後に揃って北朝方に属するようになります。

胆江地方においては、この後、新たな地域秩序の構築が始まります。その嚆矢となったのが貞和4年（1348）の大梅拈華山圓通正法寺開山です。正法寺の開山には、長部氏や黒石氏といった胆江地方及び磐井郡の国人の力が大きく作用していましたが、同時に当時北朝の東北地方出先機関である奥州管領の権力も見え隠れします。当時、奥州管領は両管領制（管領二人体制）を採っていましたが、その一人吉良貞家は中尊寺や鎮守府八幡宮の所領に対する禁制を発するなど、当地域の安定を図っています。彼の影響力もまたこの地域において正法寺が開山される一つの原動力になったとみられます。

正法寺は、吉良氏が奥州管領から退いた後、新たに管領に任じられた斯波氏とも結びつきを持ちます。その関係を背景に、正法寺は寺領の拡大に成功します。胆江地方の国人も、奥州管領である斯波氏と結ぶ正法寺に所領を寄進して関係を深め、自身の所領の安定を図ったのです。一方で、当時の胆江地方には、斯波氏の直轄領や、江刺氏などのように奥州管領斯波氏などの上部権力を通じて室町幕府と直接結びついていた有力国人の所領もあり、非常に複雑な状態となっています。しかしながら、編成の方式に違いがあるにせよ、胆江地方の国人は斯波氏の編成下にあり、当地域はその秩序によって安定していたのです。つまり、胆江地方全域は室町幕府の強い影響下にあったと評価できます。

このような状況を出現させた要因は、陸奥国内で十分な地盤を持たない斯波氏に対し幕府が積極的に支援を行ったことにあります。幕府は斯波氏に力を付けさせ、陸奥国の安定を図った訳ですが、南北朝末期になると幕閣内の勢力争いもあり、今度は斯波氏の権力を縮小させる方向に政策を転換していきます。

中世の主な氏族 ①

葛西氏 武蔵国豊島郡を本領とした豊島氏が、伊勢神宮領下総国葛西御厨に移り、葛西氏を称しました。葛西清重は、源頼朝により奥州惣奉行に任じらるなど、代々鎌倉幕府の御家人として活躍しました。留守（伊沢）氏が国府多賀城で一般行政を管轄したのに対し、葛西氏は陸奥御家人の統括を担い、中世の陸奥国中部を中心に勢力を張りました。

斯波氏 足利氏の分流で、陸奥国斯波郡を称名の地として斯波氏を名乗りました。南北朝時代には、斯波（足利・尾張）高経の子、斯波家長が北朝の奥州総大将に任じられるなど活躍します。高経の子、義将の系統は、京都で三管領家と言われる室町幕府管領を輩出する幕臣筆頭の家柄となります。高経の弟、家兼は奥州管領に任じられ、その子孫が奥州探題大崎氏と羽州探題最上氏となります。高水寺の斯波氏も室町期以降には「斯波御所」と呼ばれ、陸奥国内でも高位の家格を維持します。16世紀後半に、三戸南部氏の南進によって滅亡しました。

和賀氏 和賀氏は武蔵国の武士団、小野横山党の一員である小野姓中条氏の出身です。小野横山党は、前九年合戦で安倍貞任の首を奉じた経兼や文治の奥州合戦で藤原泰衡の首を奉じた時兼を輩出しており、従来から源氏を支えた武士団でした。和賀郡は鎌倉時代から和賀氏が治め、南北朝時代から室町時代に勢力を拡大しましたが、奥羽仕置に反発して一揆を起し、豊臣軍に敗れました。その後、関ヶ原の戦いによる混乱に乗じて和賀主馬が一揆を起しますが、南部氏に鎮圧されます。

『正法年譜住山記』にみえる寄進者と寄進地

西暦	和暦	寄進者	寄進地
1348	貞和四年	—	柳原ヲキノ在家七千疋
1352	文和元年	長部殿	五千疋
1354	文和三年	—	長坂之内二千疋
1355	文和四年	—	二千疋ノ地
1359	延文四年	黒石正端禪門	殖田ノ郷之内五百疋
1360	延文五年	越後守正端入道同子息左兵衛助	当寺之山境分
1363	貞治二年	正端	上田ニヲキノ在家千疋
1363	貞治二年	薄衣正阿弥	中田ノ郷内関田之千疋
1364	貞治三年	正端之子息三郎兵衛重貞	田中田四百疋三夏田三百疋立比丘尼庵寄進之
1368	応安元年	長坂殿	大柏山之法心坊作千疋
1374	応安七年	光清	上伊沢大柏山之内新塚郷法心房作九百疋
1375	永和元年	丹後守清家	江刺郡鴨沢郷之内石馬田同沢志田在家田三千疋
1376	永和二年	道弘	下伊沢郡舞沢郷之内楢崎田千疋
1378	永和四年	破石殿	北田千疋（伊沢郡之内）
1378	永和四年		南田千疋
1379	康暦元年	長坂之大出尼	柏山郷新塚之村田千疋
1380	康暦二年	金ノ田之美作守	根涯之堀之内田代三百疋畠共（東岩井郡之内）
1381	永徳元年	葛西清泰	伊沢郡大柏山郷内山臥屋敷千疋
1382	永徳二年	葛西平清泰	石山ニテ三千疋
1382	永徳二年	千葉近江守	東山折壁ニテ千疋
1383	永徳三年	薄衣殿	母体内栗木屋敷五百疋木懸田以上千疋
1383	永徳三年	長部殿	
		江州清長黒石正端父子"	田畠山野同意ニ寄進ス
1384	至徳元年	人首尾張守	三千疋
1386	至徳三年	惣持寺塔頭法光院	二百疋（田代）
1387	嘉慶元年	東山大原駿河守	二千疋
1388	嘉慶二年	佐々木主膳	舞草ニテ千疋
1388	嘉慶二年	今野氏	千疋（千厩）
1389	康応元年	清秀	江刺郡持田之郷内源藤太郎作千疋
1390	明德元年	清貞	伊沢郡内南羽饒千五百疋
1392	明德三年	平清泰	母体郷内泉後畠一所
1393	明德四年	菊地大膳殿	江刺郡鴨沢郷之内黒木ニ田代二百疋
1394	応永元年	衣川棹地彈正	千疋
1394	応永元年	千田氏	五百疋
1395	応永二年	江刺須合入道	鴨沢郷之内三百疋
1395	応永二年	大内氏	五百疋
1396	応永三年	檜山氏	三千疋（伊沢郡之内）
1396	応永三年	前沢五郎兵衛	千疋
1397	応永四年	岩淵氏	五百疋（東山）
1397	応永四年	元良熊谷七党	銭千貫文
1398	応永五年	黄海美濃守	千五百疋
1399	応永六年	聖寿院	上田ニ三千疋
1399	応永六年	—	江刺郡持田ニ千疋

※ 大矢邦宣・田中恵「曹洞宗の北奥布教と仏師立増—その宗教史・美術史上の意義—」（『岩手県立博物館研究報告』3、1985）掲載の表を基に作成

3. 室町時代

明德3年(1392)、南北朝が合一し南北朝時代が終わりを告げます。その前年、陸奥国及び出羽国の管轄権が突如奥州管領から鎌倉府(室町幕府の関東統治機関)に移管されます。その影響で、鎌倉府の支配が東北地方全域で始まり、鎌倉府と国人の間で軋轢が起きます。

胆江地方においても、柏山氏の本拠地である上胆沢が鎌倉府の「御料所」として指定され、葛西氏や柏山氏がその決定に抵抗しました。最終的には、葛西氏が決定に従ったことによって事態は収束しますが、このような強力な支配が鎌倉府によって陸奥国全域で行われることとなります。ちなみに、近隣の和賀郡に至っては全域が鎌倉府の「御分郡」に指定され、郡惣領も和賀氏から一族の鬼柳氏に変更されています。室町幕府も応永6年(1399)に勃発した応永の乱での鎌倉公方満兼の反幕府行動を重くみ、応永7年(1400)に斯波氏(後に大崎氏を名乗る)を奥州探題に任じ鎌倉府に対抗させようとしませんが、十分な効果を上げられませんでした。このように、鎌倉府支配への抵抗は、陸奥国南部を中心に和賀郡辺りまで確認されていますが、ほとんどが終息し、しばらくは鎌倉府の支配が進むこととなります。

応永24年(1417)、鎌倉府内部で勃発した上杉禅秀の乱を皮切りに、鎌倉府の東北地方支配は動揺を始め、幕府が東北地方の支配に介入し始めます。その最中、正長元年(1428)に南奥の白河氏と石川氏の抗争に端を発した幕府勢力と鎌倉府勢力の軍事衝突において鎌倉府は敗北し、鎌倉府の東北地方の支配体制は実質崩壊します。

永享8年(1435)、和賀一族で内紛が起こり、その鎮定のため陸奥国北部から斯波御所に率いられ八戸南部氏等の国人が大挙して押し寄せてきます。当時の斯波御所は奥州探題の支配を補完する機関で、陸奥国北部を管轄していたと推測されます。和賀郡南方からは奥州探題の軍が進軍し、その中に江刺一族もいました。江刺氏は、幕府との結びつきの強い一族でしたが、この時も探題軍の先兵となって活躍したとみられます。

幕府では、嘉吉元年(1441)の嘉吉の乱で將軍義教が殺害された後、政情が不安定化し、権力争いが激化します。その結果、応仁元年(1469)に応仁・文明の乱が勃発、幕府権力が大幅に低下します。東北地方においては、文明元年(1470)に、国人間の対立から発展した葛西・大崎氏の領内全域を巻き込んだ戦乱が発生し、江刺氏や柏山氏など胆江地方の国人も参戦します。この頃には、奥州探題などの公権力や葛西惣領の氏族内部での権力が低下し、戦乱に歯止めがかからなくなっていました。中央では、明応2年(1493)に將軍義隆が幕閣の細川政元に追放されるという明応の政変が起こり、全国的に本格的な戦国時代を迎えます。

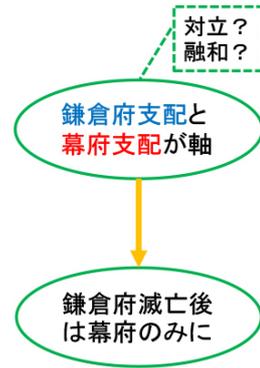
中世の主な氏族 ②

稗貫氏

稗貫氏は和賀氏と同じく、武蔵国の小野(中条)保を本貫地とした小野姓中条氏を祖とします。初めに稗貫郡を与えられたのは、中条家長とみられ、和賀氏の祖である蒔田義季の兄にあたります。稗貫氏はやがて郡内各地に分流を輩出し、惣領家と庶家の離合集散の下で郡内の支配を維持しました。戦国時代には、稗貫輝時が足利將軍に拝謁し、稗貫郡の郡主として確固たる地位を確立しましたが、奥羽仕置によって所領を失うこととなります。

室町時代の陸奥国支配体制

明德3年(1392) 東北地方が鎌倉府の管轄下に入る
 応永6年(1399) 鎌倉府が稲村・篠川両御所を東北地方に派遣
 応永7年(1400) 幕府が斯波大崎満持を奥州探題に任命
 永享元年(1429) 篠川御所満直が幕府に從う、稲村御所満貞は鎌倉帰還
 永享10年(1438) 永享の乱、鎌倉府の滅亡
 永享12年(1440) 結城合戦、合戦最中に篠川御所満直が敗死
 →以降は奥州探題単独に



中世の主な氏族 ③

阿曾沼氏

阿曾沼氏は、下野国阿曾沼郷を称名の地とする一族です。文治の奥州合戦の勲功により、源頼朝から陸奥国遠野保を拝領し、後に支配領域を閉伊郡沿岸部にまで拡大しました。本城は横田城・護摩堂城から鍋倉城（ともに遠野地域）へと移り、領内経営に専心しますが、鱒沢氏など領内有力者の離反に苦しみました。奥羽仕置では南部氏の付庸(客将)となり所領を維持しましたが、のちに和賀主馬による岩崎一揆の混乱の中で、南部利直の内意を受けた鱒沢氏ら家臣の反乱によって没落しました。

5. 安土桃山時代

中央では、天正元年（1573）に織田信長が將軍の足利義昭を京都から追放し、室町幕府を滅ぼします。そして、信長自身が政權を樹立し、天下統一に邁進していきます。しかしながら、胆江地方を含む陸奥国は、まだ統一には程遠い状況で、戦国大名や中小の国衆が入り乱れて争い続けていました。

信長は天正10年（1582）に本能寺の変で倒れますが、その後継者争いを勝ち抜いた豊臣秀吉は、天下統一の仕上げとして、天正18年（1590）に総無事令（私戦の禁止）に違反した小田原北条氏を攻めます。東北地方の大名たちも参陣を求められますが、葛西氏などは参戦しませんでした。小田原攻めは、北条氏の降伏で幕を閉じますが、秀吉は宇都宮で奥羽諸將の国割を行い、葛西氏などの参陣しなかった人々については所領没収の命令が下されました。いわゆる奥羽仕置（宇都宮仕置）です。豊臣軍は、陸奥国南部から没収地を接收し、和賀稗貫郡まで至ります。胆沢郡柏山には、越後国の大名上杉景勝が入っています。

その最中、胆沢郡柏山で所領没収となった武士達による一揆が起こり、それらが葛西・大崎旧領や和賀・稗貫郡に広がり、陸奥国北部の糠部郡では九戸政実が蜂起します。豊臣軍はその対処に追われ、改めて討伐軍が中央から派遣されることになります。討伐には、蒲生氏郷や大谷吉継など豊臣家臣のほか、東北地方の伊達政宗や南部信直が参加しています。討伐軍は天正19年（1591）に陸奥国南部から一揆を討伐していき、最終的に九戸政実を滅ぼして奥羽全域を鎮定します。戦後処理として、胆江地方には大谷吉継が入り、水沢城や岩谷堂城で実務にあたっています。柏山氏や江刺氏は、一揆には加わらなかったようですが、所領は没収されていますので、胆江地方には戻れず、南部氏に仕えることとなります。また、胆江地方は一揆鎮定後の奥羽再仕置により伊達政宗に与えられ、そのまま江戸時代を迎えます。

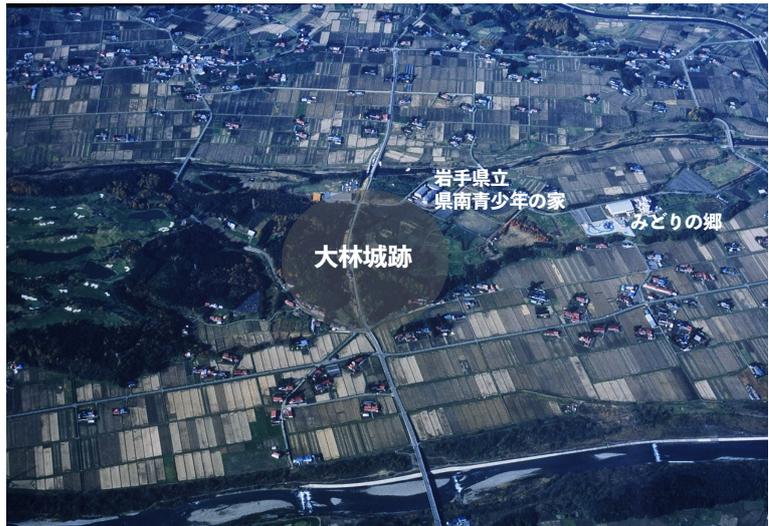
中世の主な氏族 ④

南部氏 南部氏の出自は清和源氏で、甲斐国の南部郷を拠点としていたことから南部氏を名乗るようになりました。南北朝時代に南部師行（八戸南部氏の祖）が陸奥国糠部郡に入部したことが確認され、その後、糠部郡を本拠地として活動します。南部氏には多くの分流がありますが、室町時代頃から三戸南部氏の勢力が拡大し、戦国時代に入ると戦国大名化します。三戸南部氏は勢力を拡大し斯波郡まで至りますが、この段階で奥羽仕置を迎え、豊臣秀吉から領地を安堵されます。しかし、糠部郡で九戸政実の乱が発生し対応に苦慮しますが、豊臣軍の援軍を得て鎮圧し、大名家内部の統一に成功。近世大名として、盛岡藩主を務めていくこととなります。

伊達氏 藤原北家を出自とし、もとは常陸国伊佐郡や下野国中村荘などの藤原家領を統治していましたが、源頼朝から陸奥国伊達郡を与えられて伊達氏を名乗ったとされます。南北朝時代には南朝北畠顕家に属しますが、のち北朝に従い室町將軍家に接近して京都御扶持衆の立場を獲得。戦国時代に伊達植宗は奥州探題大崎氏の内紛に介入して二男義直を大崎氏の養子に送り込み、さらに羽州探題最上氏も勢力圏内に組み込みます。以後、居城を米沢城に移した伊達氏は政宗の代に強硬な領土拡張政策を進めますが、豊臣秀吉が発した惣無事令への違背（蘆名氏との摺上原合戦）や葛西大崎一揆煽動などが露見し、秀吉に旧領を没収され、旧葛西・大崎領への所替となります。それでも石高では諸大名を凌ぎ、のちの仙台藩の礎を築きました。

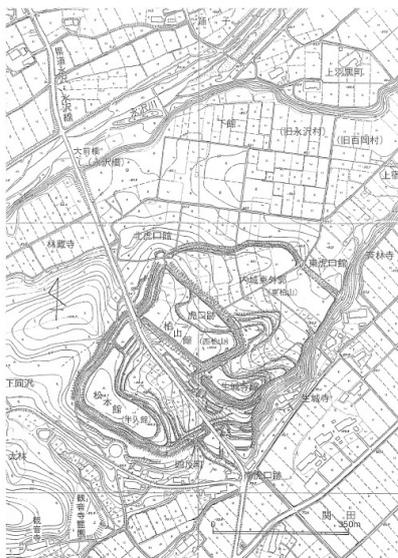
1. 大林城跡

大林城跡は、胆沢郡金ヶ崎町永沢柏山館・松本館他に所在し、南を胆沢川、北が永沢川に挟まれた永栄丘陵の先端部（標高は南西側で 106 m、北東側で 70 m）に立地します。その城域は、東西約 1300 m、南北 200 ～ 500 m、総面積約 33 万㎡を誇る胆沢地方最大の城館です。別名、百岡城・舞鶴館とも呼ばれた胆沢郡主柏山氏の居城と伝えられます。



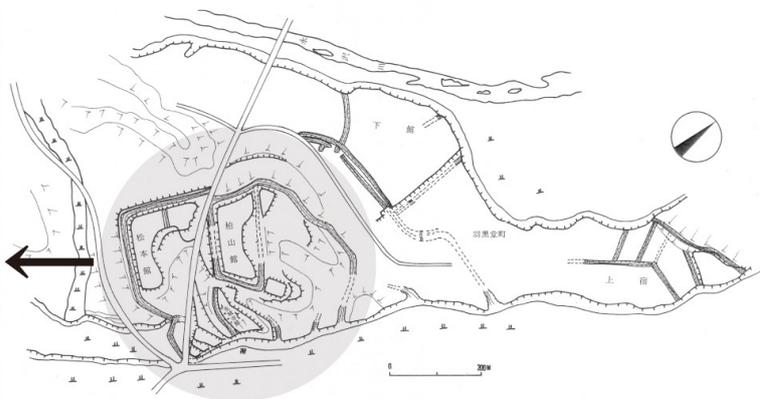
城の構造は、南西から北東へ丘陵に沿って広がる惣構の城館で、南東側には内城域である柏山館（主郭）・松本館（二ノ郭）・生城寺館（三ノ郭）が配置され、北東側の平坦部には多くの屋敷地があったと推察されています。

平成 5 ～ 7 年に行われた松本館跡の発掘調査では、巨大な堀跡・土塁跡、掘立柱建物跡・虎口跡・腰曲輪跡・帯曲輪跡などが検出され、かなり大規模な造成による城館であることがわかりました。出土した遺物は、中国産陶磁器（青磁・白磁・青白磁・染付）、国産陶器（瀬戸美濃産・常滑産）、かわらけ・石製品（石臼）などで、特に、天目茶碗や天目台などの茶器、青磁盤や青白磁梅瓶などの奢侈品（贅沢品・高級品）が出土するなど、柏山氏の隆盛が遺物から窺うことができます。城館の年代は、遺物の年代や、城館の構造から、15 世紀末～ 16 世紀と想定されます。



大林城跡主要郭

金ヶ崎町 2006 『金ヶ崎町史』1. 原給・古代・中世より転載。



大林城跡全体模式図

(財) 岩手県歴史文化財センター 1983 『館山遺跡第 2 次発掘調査報告書』岩手県文報告書第 65 集より加筆転載。

大林城跡全体図

2. 岩谷堂城跡

岩谷堂城跡は、奥州市江刺岩谷堂に所在し、北上山地西端部の独立した丘陵（館山）上に立地しています。標高は114mで規模は東西約360m、南北約230m、南端の急崖下には人首川が流れており、館山全体が堅固な要塞になっています。別名、江刺城、柄杓ヶ城とも呼ばれ、中世は江刺郡主であった江刺氏の居城。近世には伊達忠宗の御部屋領として城代制が敷かれたのち、岩谷堂要害屋敷として忠宗の子、宗規が拝領。明治維新まで岩谷堂伊達家が在館し、周囲には家中屋敷が立地しています。

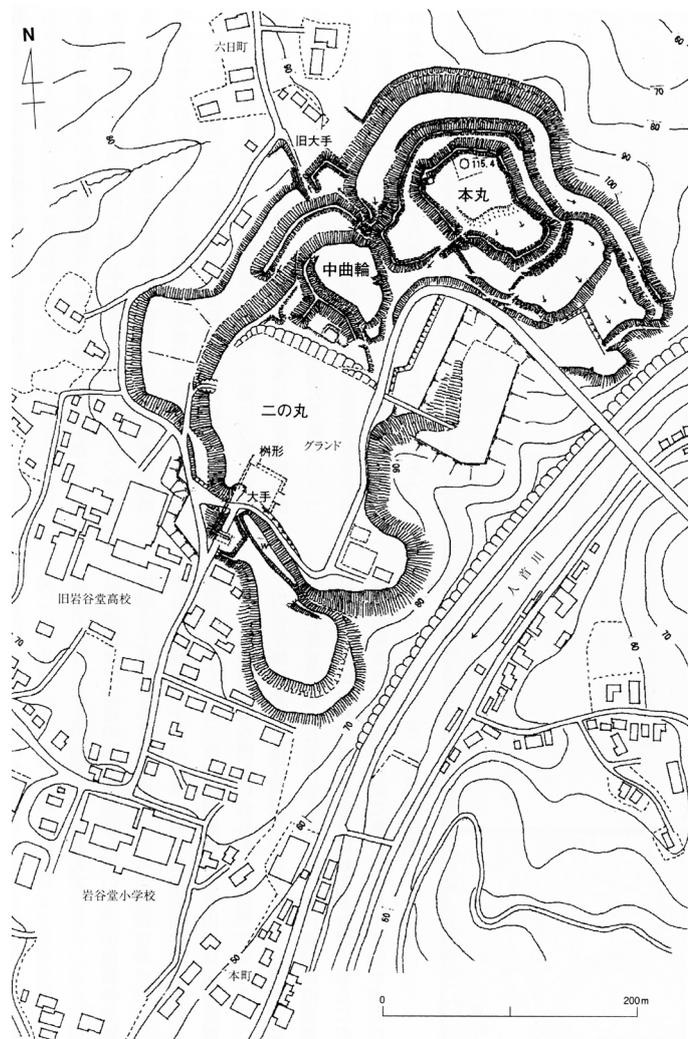
構造は北東から南西に広がる尾根上に展開した山城で、本丸と称される主郭部分には土塁と空堀が現存しています。本丸西側には帯曲輪と堀切を挟んで中曲輪が設置されており、近世の二の丸（二ノ郭）には岩谷堂伊達家の居館がありました。北西隅の大手門には外枳形虎口と幅一間の水堀が隣接し、表門の内部には土塁で囲まれた馬出しがあり、内枳形を経て二の丸の平場となります。また、北側には堀切へと通じる搦手口の裏門があり、門の左右に向かって柴垣が巡っていました。

昭和58年と平成8年に行われた部分的な発掘調査では、空堀や掘立柱建物に伴う柱穴などが検出され、特に柱穴群が密集。その中には隣接するものや切り合っているものなどがあり、相当量の建物と数回の建て替えがあったことが想定されます。

出土した遺物は近世陶磁器類のほか、中世の中国産陶磁器（青磁・白磁・染付）と国産陶器（瀬戸美濃産）がみられ、岩谷堂城の変遷の一端や築城が少なくとも15世紀代にまで遡る可能性が示されます。



岩谷堂要害屋敷普請奉覧御絵図 享保11年（1726）



●岩谷堂城縄張図（2013年 調査・作図：室野秀文 国土基本図（1：5000）を改変して使用）

3. 白鳥館遺跡

白鳥館遺跡は、奥州市前沢字白鳥館地内、北上川が半島状に大きく突き出した丘陵上に所在します。遺跡は12世紀から北上川の川湊^{かわみなと}として利用されてきましたが、14世紀末、室町時代を迎える頃、丘陵に中世城館が築かれます。一方で、それまで利用されてきた低地では遺構がなくなることから、流通拠点という機能は維持したまま、本拠地を丘陵へ移したとみられます。

城館は、14世紀末頃に築かれた後、15世紀に現在のような姿に改修されています。改修された城館は、南北に延びる丘陵を堀で大きく3つに区画されており、北から順に本丸(図Ⅰ)、二の丸(図Ⅱ)、三の丸(図Ⅲ)と俗称されています。東斜面に入り口が2か所見つかっていることから、丘陵東側の北上川に面したところを正面としていたようです。伝二の丸地区(図Ⅱ)では発掘調査などにより建物跡や土塁、入り口などが確認されますが、伝本丸地区の遺構はまばらです。このことから当時の主たる居住の場は、伝二の丸地区であったと考えられます。伝本丸地区については、かつて白山神社が鎮座していたことを考慮すると、聖地の空間であり、これを取り込んで城館が作られた可能性があります。城館の年代は、出土遺物から14世紀後半から15世紀中ごろに限定され、戦国期には使用されていません。戦国期に入り葛西氏の一円支配が進むなかで、河川交通の要衝としての機能を失うことにより城館が廃され、戦国期には一般的な村と化していったと考えられます。

白鳥館の城主について、唯一城主名がわかるのは、16世紀初期の葛西一族等奉加帳にみえる「白鳥 前飛驒守重時^{ひだのかみしげとき}」です。彼は白鳥館及び周辺地域を領した一族の当主とみられ、当時葛西一族で広く用いられていた「重」の通字を用いていることから、葛西氏の分流であったと推定されます。



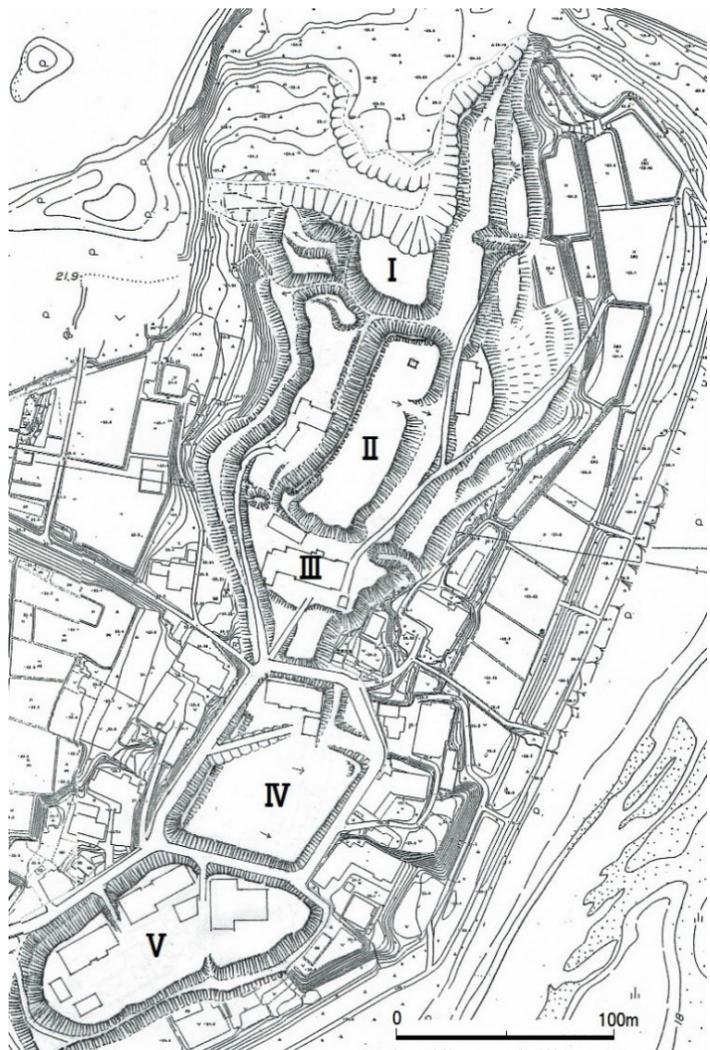
東からみた白鳥館遺跡



本丸、二の丸の間の堀跡



花の絵が描かれたかわらけ



白鳥館遺跡縄張図(室野秀文氏作図)

4. 安倍館跡

安倍館跡は、衣川の中心部、衣川が北股川と南股川に分岐する地点の丘陵上に位置します。遺跡は南北 350 m、東西 280 m の規模で、西から延びる尾根の先端部を利用し、頂部は 3 つの空堀で大きく区画されています。平場は、頂部（図 本丸跡）とその西につながる尾根部分（図 西帯郭跡）、さらに遊歩道の東部の標高の低いところ（図 二ノ丸跡）にあります。

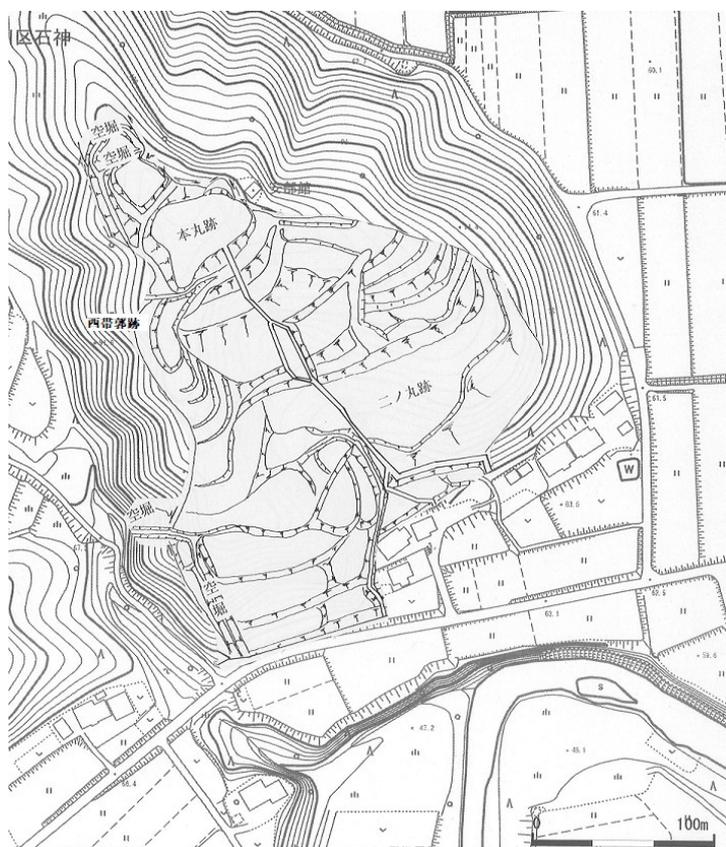
平成 4～6 年度にかけて、農村公園を建設するため、本丸跡と西帯郭跡、遊歩道部分の約 2,899m²について、発掘調査が行われています。その結果、本丸跡と西帯郭跡から、多数の掘立柱建物跡が確認され、茶碗や皿、甕などの陶磁器、鉄砲玉や湯釜などの鉄製品のほか砥石、ふいごの羽口などの遺物が出土しています。出土した陶磁器をみると、15 世紀後半から 16 世紀前半頃に利用された城館であることがわかります。陶磁器も中国産の染付や青磁などを多く所有しており、この時期の奥州市内の城館としては、格の高い主要な城館であったことが窺えます。安永 6 年（1777）の上衣川村風土記書上には「安倍新城 柏山伊勢守居城」とみえ、地元では「舞鶴館」とも伝えられてきたようです。

衣川西風山に鎮座する八幡神社に現存する天文 21 年（1552）の造立棟札に、「大旦那」として「平重政」が登場します。衣川地域を拠点とする領主の一人として知られる机地氏も同じ棟札に登場しますが、ここでは西窪氏や女石氏と同じ「旦那」の一人に留まっています。この棟札以外に明証はありませんが、あるいは平重政は机地氏などの衣川地域の他の領主よりも強い勢力を持った領主で、この館を拠点としていたのかもしれませんが。

なお、重政は、白鳥氏と同じく、平姓で「重」の字を使用していることから、葛西氏の一族だった可能性があります。



東からみた安倍館跡



安倍館跡縄張図（第 3 次発掘調査報告書を改変）

5. 御伊勢館跡（白井坂 I・II 遺跡）

御伊勢館跡（白井坂 I・II 遺跡）は、奥州市水沢佐倉河字白井坂地内に所在し、水沢段丘高位面の縁辺部上（標高 49～50 m）に位置します。城館の北側は北上川が南流し、同じ段丘縁辺部に沿って南西側には下河原館跡や、仙人西遺跡があります。また、北上川に近接することから、舟運などと密接なかかわりを持つ可能性もあります。

城館は、推定の総面積が約 3 万㎡です。東側が段丘崖で、西側の平坦面が自然の沢を利用しつつ堀と土塁で区画して城域としています。城域内部は、5つの郭によって構成され、自然の沢と堀切によって構築された一ノ郭、その北側に二ノ郭を配しています。二ノ郭の西側に三ノ郭が、南西側に四・五ノ郭が配置されています。

主郭である一ノ郭は、長軸（北西 - 南東）113 m、短軸（北東 - 南西）53 m の規模で、内部には中心建物と考えられる大型掘立柱建物跡や付属棟、柵列跡、門跡、土塁跡などが検出されています。

出土した遺物は、中国産陶磁器（青磁・白磁・染付）、国産陶器（古瀬戸・瀬戸美濃産・唐津産）、かわらけ、瓦質土器（火鉢・香炉）、銭貨（北宋銭・明銭）などで、その7割が一ノ郭から出土しています。遺物の年代から、15世紀初頭には構築され、16世紀末まで存続したと推測されます。



御伊勢館遠景（一ノ郭）



白井坂 I・II 遺跡（御伊勢館）遺構配置図

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997『白井坂 I・II 遺跡発掘調査報告書』
岩手埋文報告書第 248 集より加筆転載。

6. 中畑城跡

中畑城跡は、奥州市前沢古城字水上西地内に所在し、周囲が平坦な水沢段丘高位面の微高地上（標高 32 ～ 34 m）に位置します。別名、檜山館とも呼ばれ、館八反町・宿ノ前などの字名が残る地域でもあります。

城館は、南北約 230 m、東西約 130 m の規模で、北側の外堀と西側の旧明後沢川によって囲まれた 3 つの郭（北から二ノ郭、主郭、三ノ郭）によって構成されます。

主郭は、その周囲を内堀によって防御され、二ノ郭と三ノ郭に囲まれた中心部に位置します。城域の中では、一番高い場所に位置し、西縁辺部と北縁辺部に土塁が残っています。

二ノ郭では、北側の外堀内部から障子堀が検出されています。障子堀は、堀底に掘った土手を障子の棧状に区画したもので、攻め手が堀内を移動できなくするための障壁です。この障子堀は、4 条の細長い堀から構成されています。その規模は、幅 2.6 ～ 8.5 m とぼらつきがみられ、意図的に造成されたことが考えられます。また、外堀の北側には台形状平場がみられ、馬出しの可能性がります。

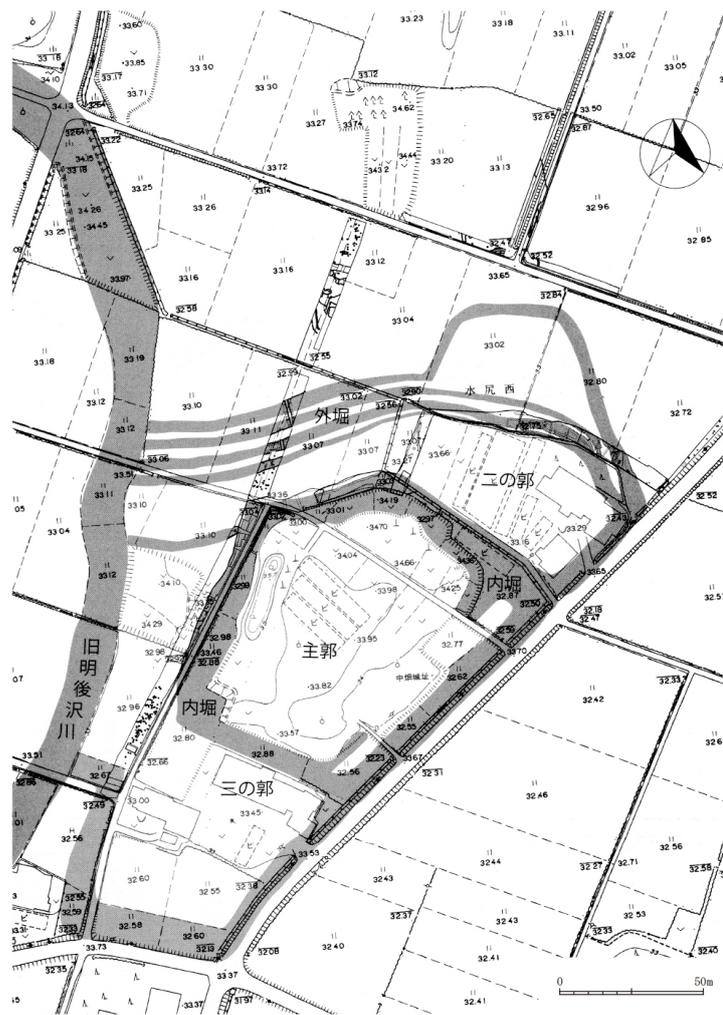
遺跡から出土した遺物は、中国産磁器（青磁・染付）、国産陶器（瀬戸美濃産）、かわらけ、木製品などであり、遺物の年代から 16 世紀の城館であると考えられます。



外堀跡（障子堀）

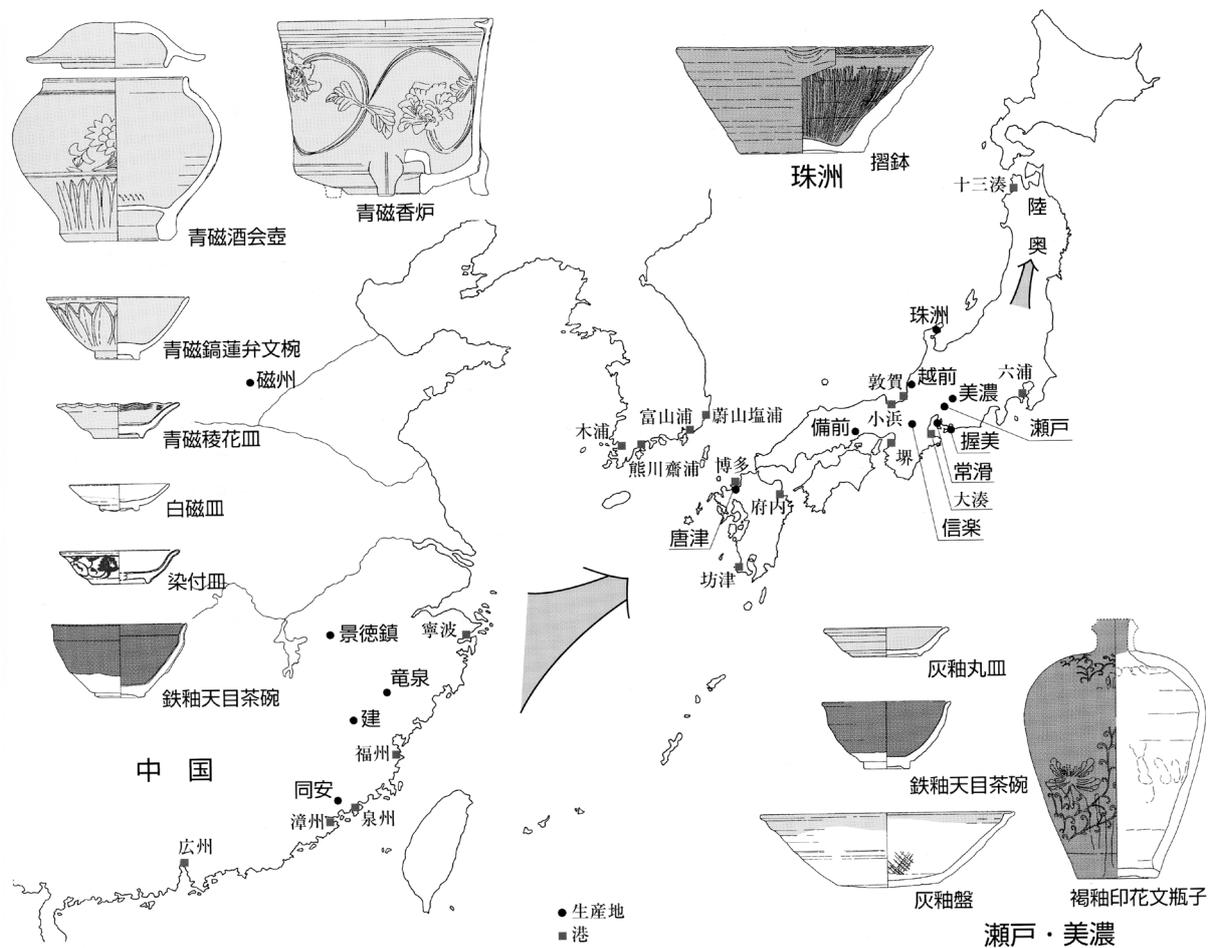


内堀跡



中畑城跡全体図

（財）岩手県文化財調査事業団附属文化財センター 2013 『八反町遺跡・中畑城跡発掘調査報告書』
岩手県文化財調査報告書第 610 号より加筆転載。



出典：盛岡市遺跡の学び館 2005『乱世を駆けぬけた武将たち』

やきものと中世城館

中国から輸入された青磁・白磁は、我が国において奢侈品として珍重されました。古代では、胆沢城などの官衙（国の役所・施設）遺跡を中心に出土しており、高級品として貴人が使用するイメージがあります。中世では、主に城館跡から出土する傾向があり、城館の規模によって器種や出土量に違いがみられます。例えば、戦国大名や国人領主などの大規模城館跡からは多種多様な中国産陶磁器が出土し、武士たちの高貴な生活スタイルが垣間見られます。

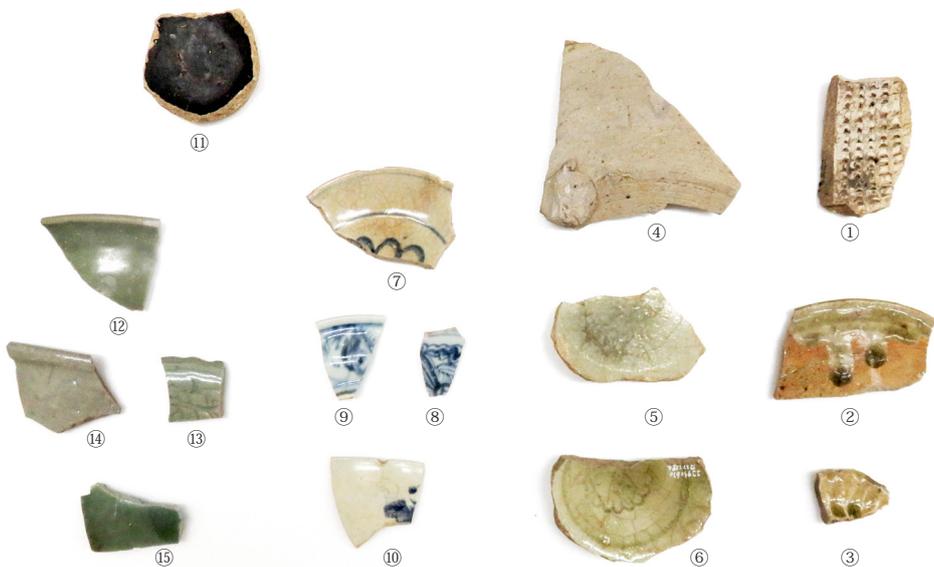
国産陶器は、尾張・三河国（愛知県）で作られていました。古代からやきものが盛んな場所で、胆沢城跡などで出土する緑釉・灰釉陶器や、平泉で出土する渥美・常滑焼が生産されていました。中世になると、様々な器種が誕生し、古瀬戸と呼ばれる陶器が作られました。15世紀末頃には、焼成窯が密窯から大量生産可能な大窯に代わり、生産地も美濃国（岐阜県）まで拡大しました。これを契機に瀬戸美濃産の製品は、大量に生産され、全国へ瀬戸物として消費されるようになりました。また、瀬戸美濃産の製品は、武士や商人の間で広まった茶の湯文化とも密接に関わり、個性豊かな茶器も続々と誕生しました。16世紀末頃になると、北九州でも陶磁器生産が盛んとなり、唐津焼、伊万里焼などの肥前製品が全国へ流通するようになりました。

主な城館跡の出土遺物

松本館跡（大林城）

胆沢郡金ヶ崎町

- ① 瀬戸美濃 天目茶碗（15世紀末～16世紀後半）
- ② 瀬戸 天目台（15世紀後半）
- ③ 中国 青磁碗（14世紀前半）
- ④ 中国 染付皿（16世紀）
- ⑤ 中国 白磁端反皿（15～16世紀）
- ⑥ 中国 青磁盤（14世紀前半）



岩谷堂城跡 奥州市江刺

- ①・② 古瀬戸 灰釉卸皿（15世紀）
- ③ 瀬戸美濃 灰釉菊花皿（16世紀）
- ④ 古瀬戸 灰釉三足盤（15世紀）
- ⑤・⑥ 瀬戸美濃 灰釉皿（16世紀）
- ⑦～⑨ 中国 染付皿（16世紀）
- ⑩ 中国 染付碗（16世紀）
- ⑪ 瀬戸 天目茶碗（15～16世紀）
- ⑫ 中国 青磁端反碗（15世紀）
- ⑬ 中国 青磁陵花皿（15世紀）
- ⑭ 中国 青磁碗（15世紀）
- ⑮ 中国 青磁細蓮弁文碗（15世紀）



御伊勢館跡（白井坂 I・II 遺跡）

奥州市水沢

- ①・② 瓦質土器 風炉（15～16世紀）
- ③ 中国 天目茶碗（15～16世紀）
- ④ 中国 白磁四耳壺（12世紀）
- ⑤ 中国 青磁皿（15～16世紀）
- ⑥ 中国 青磁陵花皿（15～16世紀）
- ⑦～⑨ 中国 染付皿（16世紀）





白鳥館遺跡
奥州市前沢

- | | | |
|----------------|---------------------|----------------------|
| ① 砥石 | ⑪～⑬ 古瀬戸碗 (15世紀) | ②⑥・②⑦ 常滑甕 (15世紀) |
| ② 青磁香炉 | ⑭～⑯ 古瀬戸瓶類 (14～15世紀) | ②⑧ 在地産陶器甕 (14世紀) |
| ③ 青磁盤 | ⑰ 古瀬戸盤 | ②⑨～③② ロクロかわらけ (15世紀) |
| ④～⑦ 青磁碗 (15世紀) | ⑱ 播鉢 (瓦質土器) | |
| ⑧ 羽口 | ⑲ 風戸 (瓦質土器) | |
| ⑨ 中国産染付 (16世紀) | ⑳・㉑ 古瀬戸壺 | |
| ⑩ 古瀬戸卸皿 | ㉒～㉕ 信楽壺 (15世紀) | |



安倍館跡
奥州市衣川

- | | |
|-------------------------|---------------------------------|
| ①～⑬ 中国産染付碗・皿 (15～16世紀) | ②⑤～④① 古瀬戸・瀬戸美濃産陶器 (15世紀後半～16世紀) |
| ⑭～⑲ 青磁碗・皿 (15～16世紀) | ④② 瓦質土器 |
| ⑲ 青磁碗 (12世紀) | ④③ 古瀬戸瓶類 (15世紀) |
| ⑲～⑲ 白磁碗・皿 (15世紀後半～16世紀) | ④④ 永楽通宝 |

7. 林前Ⅱ遺跡

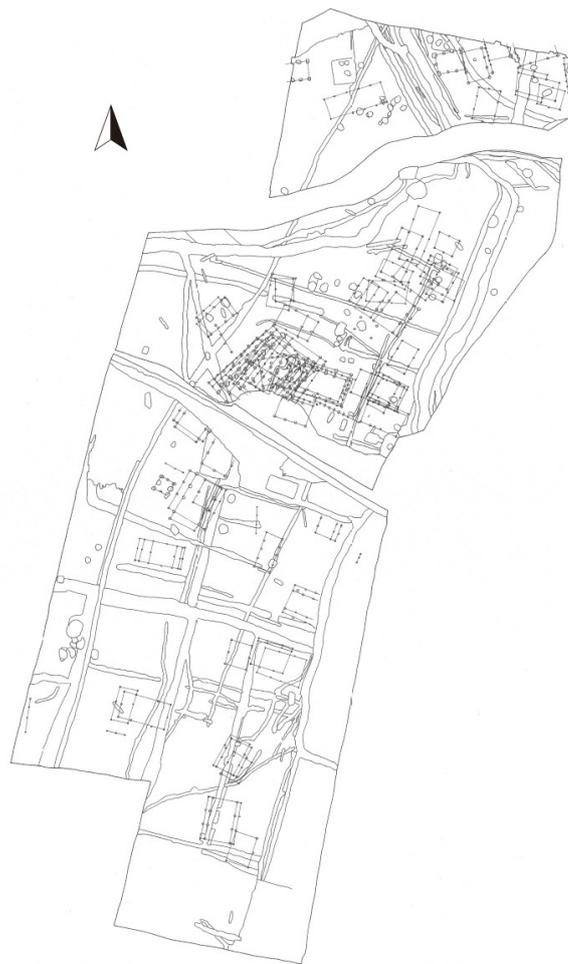
林前Ⅱ遺跡は、奥州市水沢姉体町字林前地内に所在し、水沢段丘高位面の微高地上（標高 37 m）に位置します。遺跡の西側には 15 世紀の林前南館跡、16 世紀と考えられる上姉体城跡があるなど中世城館が多くみられる地域です。

遺跡からは、中世から近世の掘立柱建物跡 60 棟が検出されています。掘立柱建物跡は、重複が多くみられ、16 世紀から近世にかけて変遷を繰り返しながら存続していたと考えられます。その中で、大型建物跡を中心として、その周囲に小型建物を配置している特徴がみられ、その階層性が表れています。おそらく、大型建物跡は在地有力者の館であり、周囲の小型建物跡を含めた集落遺跡と考えられます。また、集落遺跡であると同時に生産遺跡でもあり、鍛冶鋳物生産や土器生産も行われています。鍛冶鋳物生産では、鋳型、鉄滓、坩形滓、羽口、炉壁片が多く出土し、土器生産は 16 世紀に行われていたと考えられ、かわらけ・火鉢・香炉などの破片の他、焼成窯の炉壁や窯道具が出土しています。

その他、遺跡から出土した遺物は、中国産磁器（白磁・染付）、国産陶器（瀬戸美濃産・唐津産）、中国銭（永楽通寶・朝鮮通寶）、土製水滴、銅製錫杖など多種多様です。



林前Ⅱ遺跡全景



林前Ⅱ遺跡遺構配置図



生産された土器
林前Ⅱ遺跡
(上段) 火鉢
(左下) かわらけ
(右下) 水滴



塊形滓(左)と羽口(右)
林前Ⅱ遺跡

商品経済を支える生産遺跡

林前Ⅱ遺跡では、鍛冶^{かじいもの}鑄物生産や土器生産が行われ、様々な製品が作られていたことが想像できます。金属製品では、鑄物をはじめ、銑鉄^{せんてつ}を脱炭^{だつたん}して作った鋼^{はがね}の製造、その原料で製作した刃物などの鋼製品などです。土器生産では、儀式や灯明皿^{とうみょうぶら}で使用するかわらけ、火鉢のほか香炉などの奢侈品^{しよしひん}などです。

中世日本では、平安時代後期に出現した座^ざと呼ばれる専売同業組合が商工業を独占してきました。座は、本所^{ほんじよ}(貴族・寺社などの荘園領主^{しやうえんりやうしゆ})の保護のもと、中世を通じて様々な職種を生み、商工業発達の一翼を担いました。しかし、16世紀になると戦国大名による領国支配の中で市場主義が芽生え、自由経済政策である楽市楽座^{らくしらくざ}が行われました。これに加えて、農業生産の向上により余剰農作物の流通や、南蛮貿易による舶来品^{はくらいひん}の輸入により、商品経済がさらに活発化していきました。

時代に触発されて、戦国大名の領国では、商品経済の発達、貨幣経済の浸透により、城下町が発展していきました。その理由としては、織田信長の入京後から、畿内^{きんない}を中心に城割^{じやうわり}と家臣団の城下町集住が加速し、巨大な消費者都市が出現したことです。そのような条件によって城下町には様々な商業地が設けられ、商工業が大いに栄えました。

8. 仙人西遺跡

仙人西遺跡は、奥州市水沢佐倉河字仙人地内に所在し、水沢段丘高位面の縁辺部付近（標高 41-42 m）に位置します。城館は平坦面に造成された単郭構造の方形館で、北側には北上川が南流します。

その特徴は 2 期に分かれ、第 1 期は堀を持たず、中心建物（SB205）と付属棟で構成されます。第 2 期になって館を区画する堀が完成されます。堀跡は北辺長 62.1 m、東辺長 43 m 以上、西辺長 8.5 m 以上、幅約 3.5 ～ 5.1 m、深さ 1.6 ～ 1.9 m の薬研堀で、東西辺の 2 か所からは、急に深さが浅くなる段差をつけた仕切り遺構がみられます。仕切り遺構は、堀そのものの視覚的効果を意図して造作されたものと考えられます。また、北側には取水溝が設けられ、水堀であった可能性も高いです。内部の建物は、第 1 期とほぼ同じ場所に南北の縁を持つ 1 間 × 5 間の中心建物（SB197）を配置して、その西側に方二間建物（SB165。持仏堂？）や付属棟で構成されます。

遺物は少ないですが、中国産陶磁器（青磁・白磁）、国産陶器、かわらけ、瓦質土器（香炉）、中国銭（北宋銭・明銭）などが出土しており、遺物の年代から 15 世紀の城館跡と考えられます。

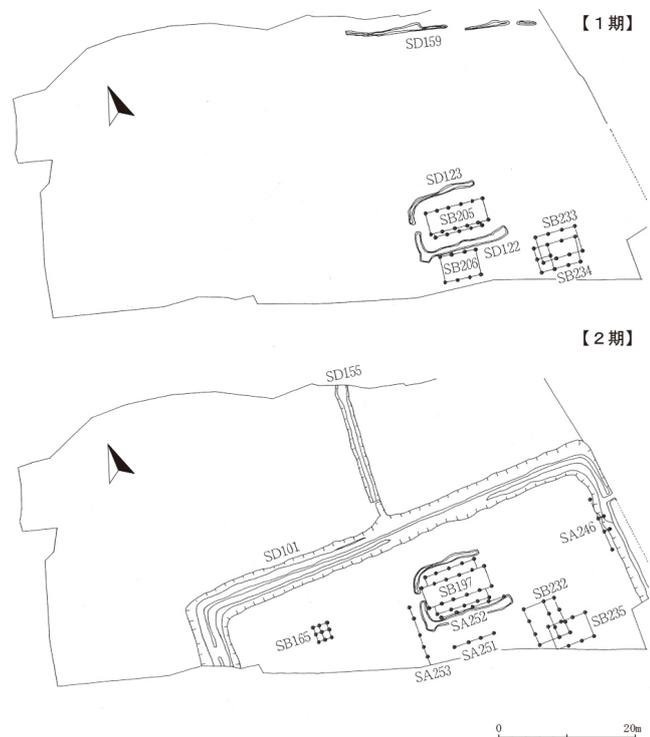
この城館は堀だけで防御施設を持たず、小規模であることから、小地域を治めた領主層の館（屋敷）跡と考えられます。



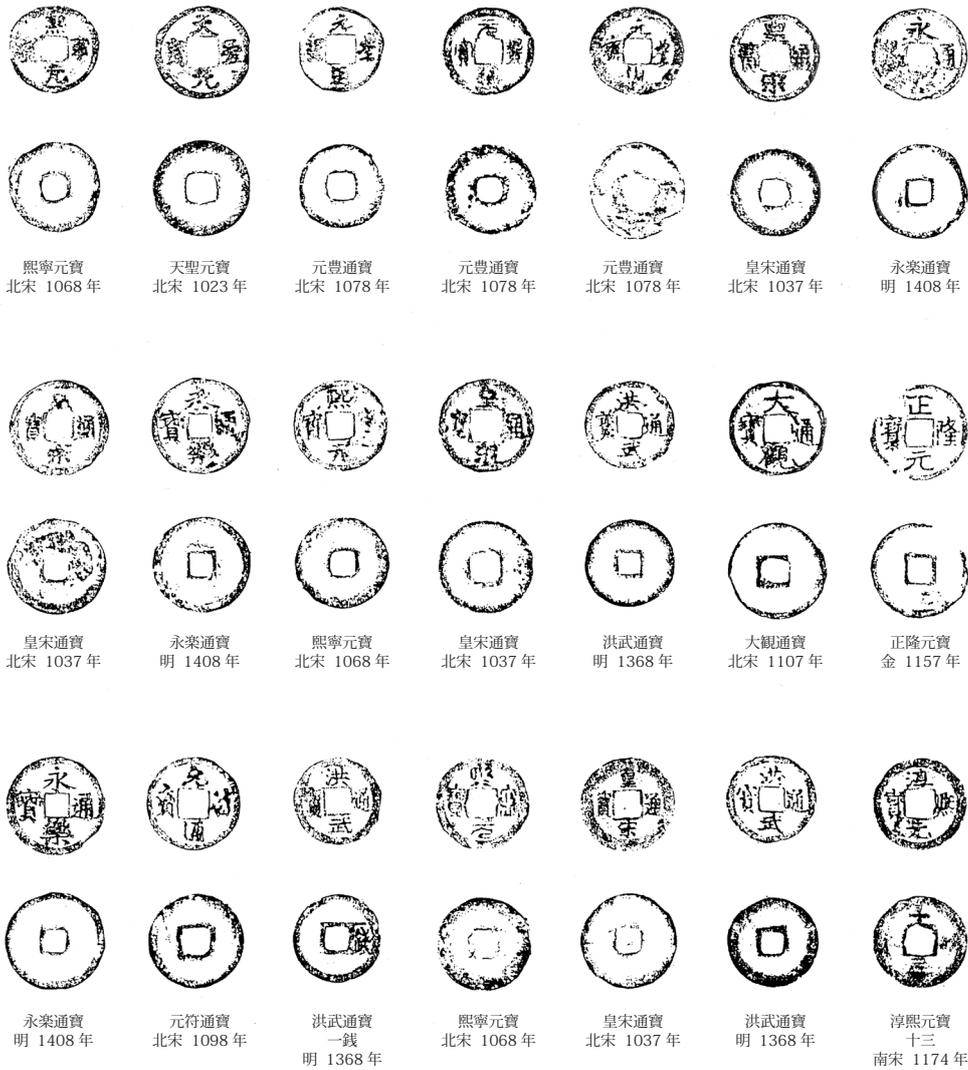
仙人西遺跡全景



堀跡



仙人西遺跡遺構配置図



中国銭と中世日本経済

仙人西遺跡の堀跡からは^{さしげに}（^{ぜになわ} 銭繩にさしてある銭）が出土しています。この緡銭は計 76 枚で、内訳が北宋銭 51 枚、明銭 19 枚、唐銭 2 枚、南宋銭 2 枚、金銭 1 枚、不明 1 枚で、鑄造年代がもっとも新しい銭は明銭の永樂通寶 7 枚です。ちなみに、中世の緡銭は 97 枚で 100 文とした慣習があったようで、なぜ 97 枚なのかはわかりません。

12～16 世紀の日本では、中国銭を通貨とする貨幣経済でした。東アジアでは北宋時代（960～1127 年）に大量の銭が生産され、アジア全域へ広まったといわれています。日本では、12 世紀後半の^{にっそう}日宋貿易にはじまり、国内へ大量の中国銭が輸入され、物々交換が主体であった経済は、貨幣経済へと転換していきます。そのため、国内には中国銭が流通して、地方にまで浸透したため、多くの中世遺跡から中国銭が出土しています。

こうして銭が社会に広まったことで、時には銭不足に陥り、銭の価値が高くなる傾向が生まれました。そのため、銭の価値が高くなることを予想して備蓄するようになり、各地の遺跡で大量の銭が壺や甕に入れて埋められた一括出土銭もみついています。

16 世紀になると、土地の価値基準が、米の収穫量を銭で換算する^{かんだかせい}貫高制となり、武士の知行高が貫高で表されました。特に東日本では永樂通寶が好まれ、永樂通寶による貫高を永高と呼び、江戸時代初期まで基本貨幣として流通しました。

Ⅲ 中世の諸宗派と胆沢・江刺郡

中世は新興宗派による巡錫の道が開かれた時代でもあります。

平安時代末期から鎌倉時代にかけて興った新しい仏教には、念仏を第一とする浄土教系の浄土宗、浄土真宗、時宗。法華経を根本に掲げる日蓮宗などに加え、当時の宋から伝えられた禅宗の臨済宗と曹洞宗があります。

中国で広がった末法思想と、極楽への往生を願う浄土教の教えは、平安時代に源信らによって広がりましたが、次第に民衆にも定着していきました。そこから興った浄土宗・浄土真宗・時宗はいずれも念仏によって阿弥陀仏の救済を受け、極楽に往生するという分かりやすい教えでした。法然は専修念仏(念仏を唱えるだけで救済される)を唱えて庶民にその教えを説き、親鸞はその教えを発展させ、一遍は踊りながら念仏を唱えることで得られる忘我の境地を説きました。

禅宗は瞑想して悟りを開いた釈迦に倣い、静かに坐して真理を得ようとする教えで、唐の時代に達磨によって創始され、宋代にも引き継がれました。栄西は宋に2度渡って臨済宗を伝え、鎌倉幕府の北条氏の保護を受けました。北条氏は建長寺や円覚寺を建立するなど、臨済宗は鎌倉政権と結ぶことで教勢を拡張させました。その後も室町政権とも係わり合いながら、五山制度(禅宗の保護と統制の目的で定めた寺格)を確立。朱子学(儒教)も需要し、五山文学と称される漢詩文学も誕生しました。同じく宋に滞在して曹洞宗を伝えた道元は、越前の山中に永平寺を建て、只管打坐(ひたすら坐禅すること)を提唱。土着的信仰とも結びつきながら曹洞宗は民衆に浸透していきました。

比叡山延暦寺で学んだ日蓮は法華経を教えの根本に据え、他宗派を論難したことで、特に念仏衆徒と激しく衝突。幕府当局からも危険視されたことで、日蓮は布教を禁じられ、佐渡に流罪となりますが、赦免後の建長5年(1253)に日蓮宗を立教し布教につとめました。

また、中世は旧来の仏教復興も凶られ、法相宗の解脱上人は戒律の再興に努め、宋から帰国した俊芿は天台・真言・律・禅の諸宗兼学の道場として泉涌寺を創建しました。高野山の明恵は法華宗を復興させ、法然の念仏に強く反論。戒律の復興と真言密教を融合させて真言律宗を始めた叡尊とその弟子の忍性は、道路建設や貧困者、傷病人の救済施設の設置など慈善事業を展開し、大きな勢力となりました。このように、鎌倉時代の律宗は南都六宗(奈良時代の仏教学派)を脱却し、新仏教の側面を帯びるようになります。

1. 浄土信仰と「まいりのほとけ」

和賀の是信房は、親鸞上人の高弟でした。俗名を源宗房といい、反平家の旗を挙げ宇治川に敗死した源三位頼政の曾孫にあたると伝えられています。宗房は常陸国に隠棲中に親鸞と出会い仏門に入ったとされています。その人物が浄土真宗の布教を目指して、弟子をとめない和賀郡に来往したのは、鎌倉前期の寛喜3年(1131)頃とされ、和賀郡の一柏(現花巻)に残る塚や石碑は、是信房が結んだとされる庵室の所在を示唆するものともいわれています。

是信房が最後に住まいした紫波郡彦部の石森山本誓寺には、大勢の信徒が参集し教団の中心として栄えることになりました(本誓寺は近世に盛岡へ移転)。是信房の教えは信徒らによって広められ、和賀・稗貫・紫波・胆沢・江刺の一带から出羽や津軽方面まで影響

をおよぼし、各地には今なお伝えられる「まいりのほとけ」の信仰があります。

「まいりのほとけ」は祭日に家やお堂に縁者近隣の人々が集まり参拝する掛軸や木像で、呼称も「まいりのほとけ」のほか「十月ほとけ」「オヒラサマ」「カバカワサマ」「太子さま」などとも呼ばれています。祭日には縁者近隣が米を持ち寄って参集し、念仏を唱え精進して過ごした後、帰りにはお供えの団子や饅頭などが土産として配られます。この信仰が浸透・定着した理由として、庶民の間にまだ菩提寺がなかった時代、亡くなった人があればその枕元、あるいは墓所に行き掛軸や木像を祀り、皆で極楽往生を祈念したことに由来するものと考えられています。

掛軸に描かれる多くは「阿弥陀如来」や「聖徳太子」で、ほかにも「善導大師」「不動明王」「地藏菩薩」「釈迦涅槃図」があり、「南無阿弥陀仏」と大書された名号などもあります。特に聖徳太子画像は父である用明天皇を看病し、病氣平癒を祈った16歳の太子の姿「孝養太子像」や、27歳の太子が甲斐国から献上された黒駒に乗り3日間の内に富士山を登り、信濃の善光寺を参拝して都に帰ってきたという逸話を題材に描かれた「黒駒太子像」が多くみられます。このことから「まいりのほとけ」は善光寺聖などの遊行僧、聖徳太子を深く信仰していた親鸞を祖とする浄土真宗が伝播したことと深い関わりがあると考えられ、ことさら岩手県中南部では是信房の活動の影響によるところが大きいとみられています。さらに、是信房の命日がある10月を祭日とする家が多いことも、かつては是信房への供養の念を捧げる日であったものが、江戸時代に庶民が菩提寺を持つに至ってからは、慣例としての「拜日」だけが残り、祖霊を祀る行事へと変化を遂げながら伝承されるようになったとも考えられます。なお、江刺地域では「オシラ神（オシラサマ）」と習合している事例も多くみられます。



黒駒太子画像
(市野々のまいりのほとけ)
室町時代
紙本著色 48.6 × 103.0cm
個人蔵 (胆沢郷土資料館収蔵)



放光阿弥陀如来像
(市野々のまいりのほとけ)
室町時代
紙本著色 37.4 × 87.0cm
個人蔵 (胆沢郷土資料館収蔵)



六字名号
(市野々のまいりのほとけ)
室町時代
紙本著色 27.4 × 101.5cm
個人蔵 (胆沢郷土資料館収蔵)

2. 一遍上人と「聖塚」

時宗の開祖、一遍上人が廻国修行の道すがら、陸奥国江刺郡にまで足を延ばして、祖父の河野通信の墳墓を訪れたのは、鎌倉時代後期の弘安3年(1280)。その墳墓前で誦経・念仏に没入する一行の姿が『一遍聖絵』に描かれています。

伊予国の豪族、河野通信は承久合戦で敗れ、当地へ流刑に処されて没しましたが、その墳墓の所在は一遍の訪れのあった後は不確かなものとなっていました。それが、北上市稲瀬水越の聖塚にあたるらしいということが昭和39年(1964)、司東真雄氏の探索によって判明しています。



聖塚(河野通信墓所)

一遍上人の踊り念仏の教えは、爆発的な人気を博し、各地に時宗の道場が開かれるなど教団としての勢いを伸張させました。時宗の総本山、藤沢清浄光寺(遊行寺)に伝えられる『時衆過去帳』には、「珠阿弥陀仏(薄衣)」「良阿弥陀仏(カサイ)」「其阿弥陀仏(ヘヌキ)」「臨阿弥陀仏(水沢)」「陵阿弥陀仏(寺林)」「重阿弥陀仏(サラキ)」「陵阿弥陀仏(田山殿)」「像阿弥陀仏(鎮守三留入道)」「直阿弥陀仏(鎮守夷路智)」「覚阿弥陀仏(南部殿信州)」「臨阿弥陀仏(薄衣勝蓮寺衆)」「其阿弥陀仏(葛西専称寺)」などの人物がみられ、尼僧では「了一房(寺林)」「東一房(三部)」「大一房(ウス衣)」「見一房(水沢)」「尊一房(シツ□□)」などの岩手県地方に関する地名や人名もみられます。葛西殿や南部殿といった領主層から一般庶民に至るまで、時宗による広範な教勢の伸展がうかがえます。

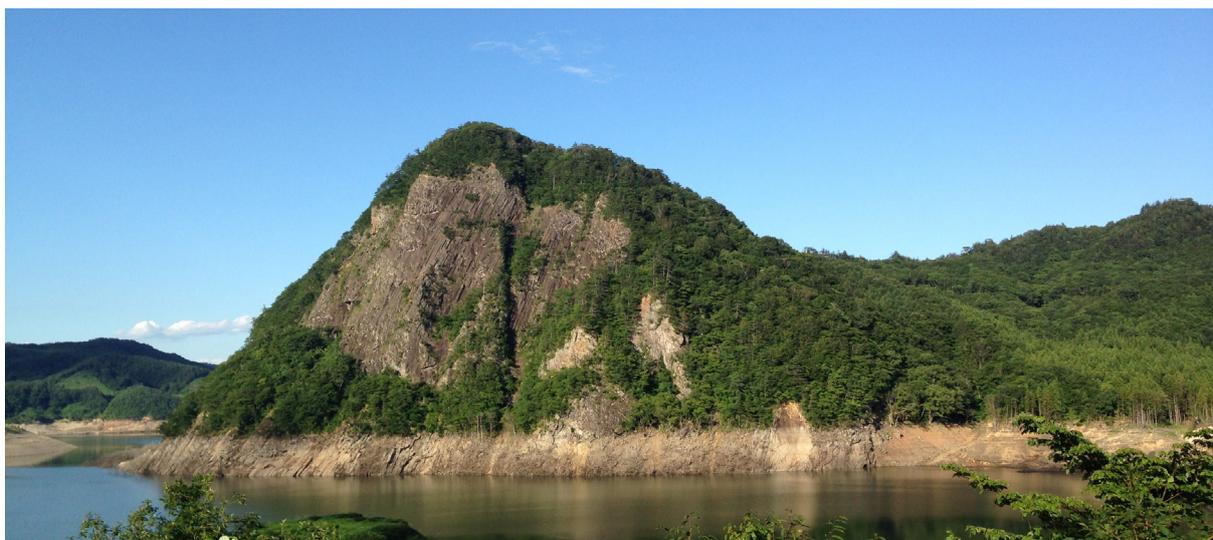
3. みちのくの道場 正法寺



正法寺本堂

曹洞宗の古刹、正法寺は貞和4年(1348)、無底良韶によって開山されました。無底は能登国の出身で、總持寺二世、峨山紹碩の高弟です。無底を継いだ月泉良印は磐井郡に移った気仙沼熊谷氏の出身で、数多くの弟子を養成し、伽藍を整備。学僧・修行僧が参集したほか多くの信奉者を得て正法寺一門を大きく発展させ、奥羽の総本山の地位をかたちづくりしました。創建からこの間までに綸旨(天皇による命令書)および總持寺峨山からの認可を得て、正法寺は永平寺、總持寺と並んで正式に東北地方における「第三の本山」の格式を得ました。その勢力は東北地方一円に広がり、往時の末寺数は508カ寺とも1,200カ寺ともいわれています。「第三の本山」の格式は江戸時代初期に幕府の政策によって失われ、正法寺は總持寺の直末筆頭寺院となりますが、由緒ある古寺として仙台藩から75石の寺領を得て、法堂(本堂)、仏殿、山門は藩によって修復されるなど格別の庇護を受けました。

4. 山岳霊場と修験道



胆沢川上流（奥州湖胆沢ダム）に鎮座する猿岩

中世は宗門の拡張に交わって、紀州熊野や出羽三山などを目指す巡礼者の姿もありました。県内では岩鷲山（岩手山）、早池峰山、胆沢郡の駒ヶ岳などが地方霊場として発展。同時にこうした霊場の縁起説を流布し、活発に巡礼の引導役を担ったのが修験者たちでした。彼らは江戸時代には里山伏として各村落に定着し、あらゆる角度から民間信仰の中樞を掌るまでに至ります。



駒ヶ岳山頂（駒形神社奥宮）

岩鷲山は岩手の最高峰、岩手山の別称で春になると斜面に残雪でワシの形が現れることからその名があります。伝承では平安時代に坂上田村麻呂が地域の安定と繁栄を願い、山頂に阿弥陀三尊を祀り「岩鷲山大権現」としたことを端緒とし、鎌倉時代には源頼朝に命じられた工藤行光が山を総括する宮司に就任。室町時代末期には南部氏が岩手山を領内の総鎮守とし、江戸時代は大勝寺が別当として支配。現在は滝沢の岩手山神社などが祭祀を行っています。

早池峰山は花巻大迫にある霊山で、瀬織津姫命を祀る早池峰神社があります。伝承では平安時代初期に狩猟の藤蔵が山中で十一面観音（瀬織津姫）の尊像をみつけ、山頂に祀ったのを創始としています。また、慈覚大師円仁が山中に建立したとされる別当寺は山頂の霊池に因んで妙泉寺と号していました。『遠野物語』には三姉妹の女神が岩手の山々を取り合い、末の妹の神が機転を利かせて早池峰を手に入れた話が伝えられています。江戸時代には藩主南部家に牛玉宝印を献上していました。

駒ヶ岳山頂に鎮座する駒形神社は仁寿元年（851）と貞観4年（862）に神階が昇叙された記録がみられます。特に貞観4年は胆沢城創建から60年の節目であり、黒石寺の薬師如来坐像が建立されるなど、当時は鎮守府胆沢城を中心に文教施策が展開していたことがうかがえます。また、藩政時代には山頂社殿が仙台・盛岡藩の藩境起点となり、両藩の庇護により約20年ごとに社殿が造り替えられていました。

5. 板碑の造立

板碑は鎌倉時代から安土桃山時代にかけてつくられた供養塔で、死者の追善や後世の安楽を願って全国各地で造立されました。

各地方で使用する石材が異なるため、地域によって形状も様々ですが、板碑の発生は関東武士の本拠地である武蔵国中北部であると考えられ、そこから徐々に周辺地域に広まり、やがて全国に分布するようになったとみられます。

全国的にみると関東地方で最も多くつくられていることがわかり、鎌倉時代に始まった板碑造立の風習は東国を中心に盛行し、中世の終末には姿を消してしまいます。やがて江戸時代には墓石の建立が一般的となることから、板碑は中世を代表する石造物といえます。

この板碑造立の風習は水陸の交通路に沿って岩手県地方にも伝わっています。

県内の板碑の総数は、概数で1,000基が所在するとされていますが、その内、磐井地方(一関・平泉)に約800基が集中。特に高密度な地域は平泉以南の北上川流域(川崎・藤沢・花泉)で、その分布は宮城県の北上川流域へと連続しています。

最古の紀年銘を有する碑は一関市川崎町門崎に所在する最明寺の建長8年(1256)銘のもので、最新の年号は一関市花泉町日形の大永5年(1525)とみられることから、岩手県内における板碑の造立は一応、13世紀後半から16世紀前半の270年間と考えられます。



板碑 応永2年(1395)
62×32cm
應永二年 乙亥 十五日
花泉町老松(老松小学校裏)
一関市所蔵(一関市民俗資料館収蔵)



板碑 鎌倉時代～室町時代
60.8×23.4×13.3cm
花泉町老松(王壇遺跡)
一関市所蔵(一関市民俗資料館収蔵)



板碑 康暦2年(1380)
73.8×35.4×15.4cm
康暦(暦)二年十月廿五日 施主 敬白
花泉町老松(王壇遺跡)
一関市所蔵(一関市民俗資料館収蔵)



板碑 康暦元年(1379)
63.0×13.6×4.6cm
康暦元年十一月十八日
花泉町老松(王壇遺跡)
一関市所蔵(一関市民俗資料館収蔵)

● 協力 (五十音順・敬称略)

小味浩之 島山篤雄

一関市教育委員会

一関市民俗資料館

岩手県

(公財) 岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター

● 主な参考文献

(財) 岩手県埋蔵文化財センター 1983『館山遺跡第2次発掘調査報告書』岩手埋文報告書第65集

(財) 岩手県埋蔵文化財センター 1984『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(昭和58年度分)』

衣川村教育委員会 1995『安倍館跡発掘調査報告書第3次』衣川村報告7集

江刺市教育委員会 1996『岩谷堂城跡発掘調査報告書』岩手県江刺市埋蔵文化財調査報告書第13集

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997『白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手埋文報告書第248集

(財) 水沢市埋蔵文化財調査センター 1997『仙人西遺跡』水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書第8集

入間田宣夫 2003『都市平泉の遺産』山川出版社

盛岡市遺跡の学び館 2005『乱世を駆けぬけた武将たち』

金ヶ崎町 2006『金ヶ崎町史 1 原始・古代・中世』

(財) 水沢市埋蔵文化財調査センター 2006『林前Ⅱ遺跡・寺ノ西遺跡』水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書19集
文化庁文化財部記念物課 2013『発掘調査のてびき 各種遺跡調査編』同成社

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2013『八反町遺跡・中畑城跡発掘調査報告書』岩手埋文報告書第610集
一関市博物館 2015『葛西氏の興亡』

飯村均・室野秀文 2017『東北の名城を歩く 北東北編』吉川弘文館

花巻市博物館 2019『花巻城一南部領の成立と展開』

発掘された奥州市展 2020—2021

中世の譜

—胆沢・江刺郡の城館とその時代—

主催：奥州市教育委員会

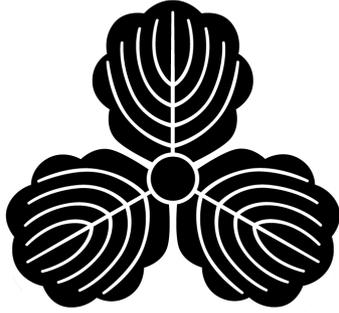
奥州市教育委員会事務局歴史遺産課

〒023-1192 奥州市江刺大通り1-8

TEL 0197 (34) 1315

FAX 0197 (35) 7551

E-Mail rekishi@city.oshu.iwate.jp



奥州市教育委員会事務局歴史遺産課
奥州市牛の博物館
奥州市埋蔵文化財調査センター
えさし郷土文化館